

〔紀伊國續風土記 物産十下〕海獺アザ本草和名抄に阿之加、又引本朝式葦鹿形、膾舘獸に似て、小なるは齒牙に似たり、目は大にして、耳至りて小く、吻鬚に爪ありて、全身短毛アリ、常品は其毛茶褐色なり、又白色黒白雜色蒼黒色等もあり、左右の扁鬚に爪ありて、末に岐あり、尾は獸尾の如く至りて小く、尾を挾みて又兩鬚あり、これにも爪五ツありて、末は分れて指の如し、皮は禿とし、或は馬具に用ひ、或は荷包の類に製す、肉は剛くして味佳ならず、本草綱目に主治を缺く、時珍食物本草に、味鹹甘平無毒、食之消腫及癰瘡、邪氣結核といへり、又皮肉の間に脂膏多し、よく金瘡を治す、

海部郡衣奈庄大引浦の海中に、周百四十間餘の小島あり、往年より葦鹿島といふ、此島へ海獺毎年秋の土用前後に來り、春の土用前後には何所にか歸る、毎に人なきを窺ひて、此島上に出で、十四五尾より多きときは二三十尾も群遊す、若人を見れば忽鳴て群舉りて海中に飛入る、海中を行く時は半身を水上に顯はし、疾く潮を飛し行く、甚畏るべき狀あり、官より命じて鳥銃をもて打捉しむ、世人慢りに獲る事許さず、

〔夫木和歌抄三十三〕家集寄舟戀 えぞふね

源仲正

わが戀はあしかをねらふえぞ舟のよりみよらすみ浪間をぞまつ

胡猿

〔書言字考節用集五〕魚氣形、毛詩註、獸名、似猪、東海有之、其皮背上有斑文、胡猿

〔本朝食鑑十一〕膾舘臍略中

附錄登止土人所謂葦鹿之大者也

〔和漢三才圖會三十八〕胡猿 海驢夫木集 別有海驢 與此不同 胡者夷之名、猿者大獺之名也、俗云登土

按、胡猿松前海中、有之、形色氣味、共似膾舘獸而大也、但以齒辨之、胡猿齒如羣常、好眠、常寢於水上、亦奇也、本草所謂海獺出於前、一種乎、蓋海獺膾舘、阿茂悉平、胡猿之四種、同類異物也、特以膾舘人賞之、故

以胡猿僞充膾舘獸、

〔蝦夷島記〕蝦夷島より出るもの品々

一ト、ノ皮